

2021 年 9 月 5 日（日）「原点」

ガラテヤ 2:16

しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによって、誰一人として義とされないからです。

【序論】

先週まで、約 1 年半かけて「コヘレトの言葉」を学んできました。その間に、次に扱う書をどこにしようかと思案しておりましたが、私の中で何となくガラテヤ書が思い浮かんできていたところ、ある信徒の方が同じくガラテヤ書を提案してくださいました。これも不思議な主の導きと確信し、役員会での承認を得て、今日からガラテヤ書の学びを始めることにいたしました。パウロ書簡を扱うのは久しぶりでして、神学生時代に取り組んで以来ですから、およそ 13 年ぶりとなります。

本書を学び始めるにあたり、書簡というものの性質に思いを馳せましょう。聖書の中の一文書だというだけで読者は構えてしまう傾向がありますが、元来これは一人のクリスチャンが自分の愛する教会に向けて、どうしても伝えたいメッセージを書き送ったものにほかなりません。しかし、それがやがてキリスト教の教理の基盤となっていった。講解説教に当たってはどうしても構造分析のようなことをしなくてはなりませんが、元々「章句」というものの自体がない一本の手紙であったということを思い出す必要があります。おそらく、パウロはこの手紙を何日もかけて書いたのではなく、ある種の怒りを込めて、まとまった時間で一挙に書き上げたのではないかと想像します。よって、私たち読者も、まずは止まらずにこれを通読してみて、解説書なしで自分の目で著者の思いを汲み取る努力をしてみるとよいでしょう。現在は多くのコミュニケーションツールによって、世界のどこにいてもリアルタイムで連絡を取り合える社会ですが、当時はもちろんそうではありませんでした。もう一度アナログ時代に戻り、一文字ずつ手書きで愛を込めて書き記された手紙であったことを感じてみたい。少し似た作業として、私は最近バッハの作品の各声部を書き出すということをやっていますが、それによって音符一つひとつに込められた作曲者の思いがジンワリと伝わってくるものです。

今日は初めにあたり、「ガラテヤ書とはどういう書であるか」をお話しさせていただきます。朗読箇所としては、本書の中心聖句である 2:16 を選ばせていただきました。

【本論】

本論 1. 書簡の解釈

ガラテヤ書の著者がパウロであることは、ほぼ疑いないでしょう。パウロ書簡の価値は、それが福音書のように「編纂された文書」ではないところにあります（一次資料）。パウロの生の声が聞こえ、その書かれた背景が見えてくる。当時の教会で何が起きていたのかが手に取るように分かるのです。それが書簡を学ぶ者に与えられた特権と言えるでしょう。同時に、書簡を学ぶうえでのやや難しい問題は、第1世紀のヘレニズム文化の下にあった教会で起きていた問題に対する解決が、21世紀の日本という全く異なる時代と場所にある教会に対してどのように適用されるのかということです。時代によって価値観は変わり、特に近年、ジェンダー、感染症、テクノロジーの進歩などについて考えなくてはならなくなってきましたので、聖書に書かれていることばをただ右から左に伝えればよいということではありません。時代に即した聖書解釈が必要なのです。その上で、移りゆく世にあっても変わることのない真理を探っていく。本書にはその真理が明確に描かれています。

本論 2. ガラテヤ書のメッセージ

ガラテヤ書の中心メッセージは、「キリスト者にとって救いの条件とは何か」ということです。ガラテヤ教会に集う人々の多くはギリシャ人でしたが、そこに集っていた一部のユダヤ人（いわゆるユダヤ主義者）が「異邦人も旧約の律法を守らなくては（割礼を受けなくては）救われない」ということを言い始めました。それによって教会が混乱に陥っていたのです。先にパウロが宣べ伝えていた福音は、「救いは人が律法を守ることによってではなく、イエス・キリストの恵みに依り頼む信仰によってのみ与えられる」というものでした。しかし、旧約の古い伝統を保持するユダヤ主義者たちは、旧約時代に求められた「神の民に加わる条件」としての割礼を、尚もギリシャ人に要求したのです。これは「求められるなら受ければいいじゃないか」とか「割礼を受けているに越したことはない」というような話ではありません。救いの根幹が問われている。これから先のキリスト教会が進んで行く道を決定的に分ける問いであります。これらのユダヤ主義者たちは、パウロの使徒性に疑問を呈し、パウロは真にキリストによって召された使徒ではないという主張もしていました。それに対してパウロは徹底抗戦し、「信仰による義」はキリストご自身から出たものであることを語っていくのです。

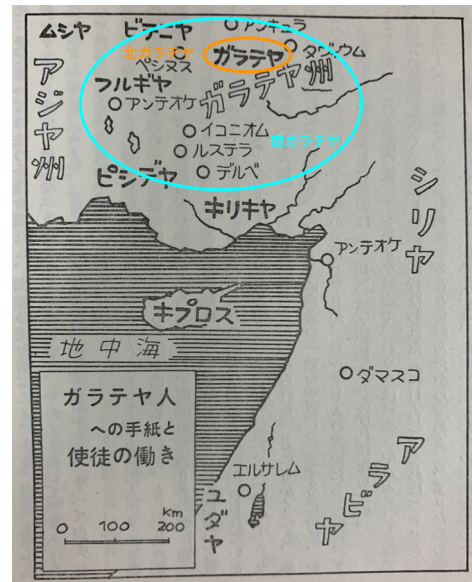
しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによっては、誰一人として義とされないからです。(2:16)

本論 3. 宛先、執筆年代

ガラテヤ書を学ぶ前提として、一応知っておくべきことがあります。それは、本書の宛先について二つの説が存在するということです。「ガラテヤ」という地名を、地理的に狭い意味での「北部ガラテヤ地方」と捉えるか、より広い意味で、政治的に古くから用いられた南部の諸州をも含めた「南部ガラテヤ地方」と捉えるかの違いがあるのです。複雑にならないように簡潔にご説明します。

①北ガラテヤ説

この古い見解によると、パウロは小アジアの中央北部に位置する教会（ペシヌス、アンキュラ、タヴィウム）に向けて手紙を書いたこととなります。パウロは第二次・第三次伝道旅行の際にこの地域を訪れたようです（使徒 16:6、18:23）。この説によると、本書は紀元 53～57 年の間にエペソかマケドニアで書かれたこととなります。



新聖書注解より

②南ガラテヤ説

この見解は比較的新しく、パウロは第一次伝道旅行の際に設立したローマの属州であるガラテヤ地方（アンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベ）の諸教会に向けて手紙を書いたこととなります。ただ、この説は更に以下のように分かれます。

- (1) 第一次伝道旅行の後、エルサレム会議（使徒 15 章）の前（紀元 48-49 年）の間にシリア・アンテオケで書かれた。
- (2) 第一次・第二次伝道旅行中の 2 回の訪問（使徒 13:4-14:28、16:1-6、18:23）の後、紀元 50～51 年頃にコリントで書かれた。

いずれの説にせよ、本書の本旨は変わることがありません。

本論 4. 現代への適用

もう一度、今日の聖句である 2:16 を読んでみましょう。

しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによっては、誰一人として義とされないからです。

ここでは、神の御前における義（すなわち「救い」）とは、人間の如何なる業によるのでもなく、ただキリストの真実に依り頼むことだと教えられています。罪人である人間には律法を守ることができず、人が神との交わりを回復する唯一の道は神の恵みである。神の恵みはキリストの十字架によって完全に現れた。そして、信仰とはこのキリストの救いを受けるためのただ一つの道である。本書ではこのことが一貫して教えられています。

この「福音の真理」はどの時代、どの国、どの文化においても損なわれることがありません。しかし、時代や場所が変わると聖書のメッセージそのものが変えられてしまう危険性があります。いえ、福音がコンスタントに語られていたとしても、私たち人間は再び律法主義の泥沼にはまり込みやすいのです。「信仰のみ」という自由を得たはずの私たちが、自分は本当は救われていないのではないかという不安に苛まれ、自分の力でどうにかして神との関係を回復する手段を考え出そうとするのです。また、この姿勢は自分の中だけに留まらず、隣人に対してまで「クリスチャンはこうでなければならない」ということを押し付け始めるとき、私たちは本書に登場する「ユダヤ主義者」の一人になっているかもしれません。福音という「目に見えないもの」、ことばによる約束を信じ、真の自由に生きることを本書は目指しています。私たちが語ることば、私たちの生き方に福音の自由があるかどうか問われているのです。

【結論】

宗教改革者ルターは「私はこの手紙と結婚した」と言うほどに本書を愛しました。内村鑑三も本書について「福音信仰のマグナ・カルタ（大憲章）」と言いました。これから共に学んでいく私たちも、福音の原点に立ち返り、知らずして自らを縛り付けている価値観や固定観念から解放され、私たちの心の内に潜む「ユダヤ主義」に別れを告げ、真の自由を与えてくださる聖霊に生かしていただきたいと思います。

【祈り】

人に真の自由を与え給う神よ。人間世界は罪の縄目に縛られています。欲望の虜になった者は、自分にも他人にも不幸をもたらしていきます。また、敬虔に生きているはずが、その敬虔さをもって人を傷つけることもあります。今一度、自分の生き方に福音の自由があるかどうかを見直したいと思います。これから学んでいくガラテヤ書を通して、一人ひとりの心が福音によって解放されていきますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
すべての人に無条件の救いを提示し、罪人を御許に招き給う、父なる神の愛、
律法の業によらず、信仰のみによって、救いを受け入れさせ給う、主イエス・キリスト
の恵み、
福音に生きる自由を与え、遠慮なき神との交流へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。